

ニコス・カザンザキス

「エル・グレコへの報告」

序、先祖たち

藤下 幸子 訳

現代ギリシア語教室エリニカ 講師

グレコへの私の報告は自叙伝ではない。私の個人的な人生は、私にとってのみ、何らかのまあそれなりの価値はあるが、他の誰にとっても意味があるとは限らない。私の人生に私が認める唯一の価値は次のことである。それは、一歩一歩登って、生きる力と頑固さが連れて行ける限りの高みに到達しようとする、私の人生の戦いだということである。私が独断的に「クレタ人の眼差し」と名付けた頂に。

さて、読者の皆さん、あなた方はこれらのページに私の血の滴りで書かれた赤い線を見出すだろう。それは理想を求め人々の間で苦悩した私の足跡の印である。人の子と呼ばれるに相応しい人は十字架を担いで自分のゴルゴダの丘を登る。多くの人たち、ほとんどの人たちは一段目、二段目に着くと息を切らしてしまい、道半ばでへたり込み、ゴルゴダの頂——自分の義務の頂という意味だが——に達して十字架に架けられ、復活し、自分の魂を救済するということはない。十字架に架けられることに怖気づき、恐れて、それが復活への唯一の道であることを知らない。他に道はないことを。

私の登頂には四つの断固とした段が聳え、その一つ一つには聖なる名前がついている。キリスト、ブツダ、レニン、オディツセアスである。この最も偉大な魂の一つからもう一つへの私の血まみれの歩みを、太陽が沈みかけている今、この紀行文に記そうと、もがいている。余命いくばくもない者が運命の石ころだらけの道を登っていく様子を。私の魂は叫びそのものである。私の作品は全てこの叫びの注釈である。

生涯、一つの言葉がいつも私を苛み、鞭打っていた。《上り坂》という語が。この上り坂を真実と空想を交えて

ここに表現したい。私の登攀が残した赤い足跡も。そして《黒い兜》を被って土に降りて行くまでに、と急いでいる。何故ならこの血まみれの線は、私が辿った道を地上に示す唯一の足跡であるうから。私が書いたり成したりした事は、水の上に書かれたり成されたことであり、すぐに消え去っていく。

記憶に思い出せと叫ぶ。空中から自分の人生をかき集める。將軍の前の兵士のように起立して、グレコに私の報告を伝える。何故ならグレコも私と同じクレタの土で捏ねられ作られていて、現存の、あるいはかつて生きていた闘士の中で、最もよく私を理解できるから。彼もまた同じ赤い線を石の上に残さなかったであろうか？

序

私は、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚、頭脳といった私の仕事道具を纏める。もはや日が暮れて、一日の仕事が終わり、モグラのように家に帰る、土の中に。働くのに疲れたからではない。疲れたのではなく、日が沈んだから。

日は沈み、山影が薄れ、私の頭脳の山並みはその頂にまだ辛うじて光を留めている。だが、聖なる夜が大地か

ら立ち上り、空から下りて来てそれを押しつぶす。光は降伏しないと誓ったが、救済が無いことを知っている。降伏はしないだろう。が、消え失せるのだ。

私は最後の視線を周りに投げかける。誰に別れの挨拶をするべきか？ 何に別れの挨拶を？ 山々に、海に、ペランダの実ったぶどう棚に、徳に、罪に、爽やかな水に？ 無駄だ、無駄だ。これらはみな、私と共に土の中に下りるのだから。

誰に打ち明ければいいのだろう、喜びや苦しみを、ドン・キホーテ的な青春の密かな憧れを、その後の神や人々との厄介な衝突を、そして最後に、燃え尽きかけても死ぬまで灰になるのを拒む老いのみつともない自惚れを？ 誰に言うべきだろうか、神へ向かう石ころだらけの上り坂を、手で足で攀じ登ろうとして、何度滑って転んだか、何度、血まみれになって立ち上がり、再び登り始めたかを？ 心を打ち明けるために、私の魂のように傷だらけで敬われることのない魂を、どこで見つけられよう？

悲しみを共にするかのうちに、クレタの土塊を私の手のひらで静かに握りしめる。放浪する時はいつもその土塊を持っていた。大きな苦しみがある時は、それを手のひらの中に握りしめると力を得た。大きな力を。愛する

友の手を握りしめたかのように。だが、日が沈み、一日の仕事が終わった今、その力を何としよう？ もう、要りはしない。このクレタの土塊を手に取り、ふんわりとした優しさと愛情と感謝の気持ちで握りしめる。愛する女の胸を私の手の中に握りしめ、別れを告げるかのように。私は悠久の昔からクレタの土塊であった。そして未来永劫クレタの土塊であるだろう。クレタの荒くれた土塊よ、お前がぐるりと回って闘う人となったその一瞬は、稲妻のように通り過ぎていくのだ。

何という闘争、何という苦悶、目に見えない人食い獣の何という追跡、この一握りの土塊は、何という危険な天上の、また悪魔の力なのか！ 血と涙と汗で捏ねられ、泥となり人間となつて上り坂を進んだ、到達しようとしてどこに到達しようというのか？ 暗い神の山塊を喘ぎながら登っていった。神の顔を見つけ出そうと、手を伸ばして探しに探した。

もはや絶望的であるこの最晩年に、この暗い塊には顔が無いことを感じた時、細工されていない頂を彫り、それに顔を——神の顔を——与えるということは、何というずうずうしさと畏れに満ちた新しい闘いだろうか！

だが、一日の仕事はもう終わり、仕事道具を纏める。

他の土塊たちがやってきて、闘いを引き継いでくれば良い。我々死すべき人間は、不死の大隊であり、我々の血は赤い珊瑚であり、深淵の上に一つの島を築こう。

神を創造するのだ。私も置いた、自分の赤い小石を、一滴の血を。神を堅固にして失われることがないように、私を堅固にして失われることがないように。私は義務を果たした。

「さようなら」

私は戸を開けて立ち去ろうと、手を伸ばし、大地の門を握る。だが、まだしばらくは明るい玄関口で立ち止まる。目や耳や胸をこの世の石や草から剥がすのは難しい、とても難しい。《私は満足している、私は穏やかである、これ以上何も欲しいものはない、義務を果たしたので去る》とお前は言う。だが、心は石や草にしがみついて抵抗し、懇願する《もうちょつと、待って！》と。

私は自分の心をなだめようと苦闘する。心が自分の意思で「はい」と受け入れるように説得しようと苦闘する。奴隷のように鞭打たれ泣きながらではなく、十分に食べ飲み満足し、もはや欲しいものは何も無いので席から立つ王者のように、地上から去ろうではないか。しかし、心は胸の中でまだ鼓動し抵抗して叫んでいる。《もうちょ

っと、待つて！≫

私は立ち止まり、光に最後の視線を投げかける。光もまた人間の心のように抵抗し、闘っている。雲が空を覆い、生ぬるい霧雨が私の唇に落ちてきた。大地の匂いがした。誘惑するような優しい声が大地から立ち上って来た。《おいで…、おいで…、おいで…》

霧雨が強くなった。最初の夜の鳥が溜息をついた。鳥の痛みが夜の葉陰から濡れた空気の中にとても優しく転がり出てきた。静けさ、大いなる優しさ、家には誰もいない。外では喉を渴かせていた農地が感謝して、黙って幸せそうに秋に初めて降る雨を飲んでいた。大地は赤ん坊のように乳を吸おうと空に向かって体を起こした。

私は目を閉じた。いつものようにクレタの土塊を握ったまま眠りに落ちた。眠りに落ちて、夢を見た。夢の中で夜が明け、明けの明星が、私の上に懸って揺れているようだった。今にも落ちて来そうだった。それで、人気がない乾ききった山の中を、たった一人で走りに走った。遙か彼方の東の方に太陽が現れた。が、太陽ではなかった。火の付いた炭が一杯入ったブロンズの盆であった。空気はぐつぐつと煮えたぎっていた。時々、一羽の灰色のヤマウズラ^三が岩から飛び立ち翼を羽ばたかせ、カッ

カッとかハッハッとか鳴いて、私をからかっていた。一羽のカラスが私を見るなり、山の曲がったところからパツと飛び上がった。きつと私を待ち受けていたのだらう、大笑いしながら私の後についてきた。私は怒ってカラスに投げ付けようと身を屈めて石を掴んだ。だが、カラスは姿を老人に変えて、私に微笑みかけていた。

私は恐怖に捉えられ、また走り始めた。山々がぐるぐると回り、私も山と一緒に回っていた。回転が徐々に速くなってきて眩暈がし始めた。私の周りで山々が跳び跳ねていた。不意に、これは山ではないと感じた。それは太古の精神的指導者の化石で、黒い巨大な十字架が私の右側高く岩に釘づけられ、その上に巨大なブロンズの蛇が架けられていた。

稲妻が私の脳裏を切り裂き、周りの山々を照らした。私は理解した。自分が曲がりくねった恐ろしい峡谷に入っていたのを。そこは、今から何千年も前、エホバを先頭にユダヤ人たちが、ファラオの恵まれた肥沃な土地を去り、住み着いた場所だった。この峡谷はイスラエルの民が腹を空かせ、喉を乾かせ、悪態をつきながら鍛錬された、熾烈な作業所となった。

私は恐怖に捉えられた。恐怖と大きな喜びに。頭がく

らくらするのを落ち着かせようと、岩に凭れた。目を閉じた途端、私の周りのあらゆるものが一瞬にして消え失せた。私の前にはギリシアの浜辺が広がった。濃紺の海、赤い崖、その崖の間に真つ暗な洞窟の丈の低い入り口があった。突然、空中に手が現れて、私の手のひらに燃えた薪を突っ込んだ。私は命令を理解し、十字を切って洞窟の中にもぐり込んだ。

凍るように冷たい黒い水をバチャバチャ跳ねながら、洞窟の中をグルグル回った。頭上には濡れた青い鍾乳石が垂れ下がっていた。大地からは巨大な石の男根が膨れ上がり、薪のきらめきの中で、ピカピカと輝き、笑っていた。この洞窟は大きな河の鞘であったが、長い歲月の間に、河は流れを変え、この洞窟を空っぽのまま放置していた。

ブロンズの蛇が怒ってシューシュー音を立てた。私は目を開けた。山々、峡谷、崖が再び目に入った。眩暈は収まっていた。あらゆるものが動かなくなり、照らされて、私は理解した。同じように、私の周りの焼き尽くされた峰々をも、エホバは通れるように深く掘っていたのだと。私は神の恐ろしい鞘の中に入り込み、神の足跡を辿った。

「これこそが道だ。これこそが人の道で、他には無い」と私は夢の中で叫んだ。

この図々しい言葉が私の唇から跳び出すや否や、竜巻が私を包み込み、荒々しい翼が私を持ち上げた。あつと言う間に、私は神が歩んだシナイ山の頂にいた。空気は硫黄の臭いがしていた。唇はチクチク痛んだ。無数の見えない火花が刺していたかのように。臉を上げた。水もなく、木もなく、人もいない、こんなにも冷酷な、こんなにも調和のとれた光景を、私の目は、私の胸は、心から喜んだことはなかった。希望もなかった。ここでは絶望した人、あるいは誇り高い人の魂が究極の幸福を見出す。

立っていた岩崖を眺めた。御影石に刻まれた二つの深い穴は、空腹の「ライオン」が現れるのを待っていた、角を持った預言者^四の足跡だったのだろう。彼は、ここシナイ山の頂で待つようにと命令されはしなかったか？彼は待った。

私も待った。崖の上から身を乗り出し、耳を澄ませた。突然、遠くに、とても遠くに、くぐもるような足音がした。誰かが近づき、山は揺れ動いていた。私の鼻孔がびくびくした。空気全体に先頭の雄山羊の臭いがしていた。

《来られる！ 来られる！》私は眩き、腰のベルトをきつく締めた。闘おうと待ち構えた。

ああ、どれ程この瞬間を心待ちにしてきたことか！ 目に見える図々しい世界が間に入ってきて私を惑わせることなく、天の密林の飢えた獣と顔と顔を突き合わせるこの瞬間を。「見えない者」と！ 「飽くことを知らない者」と！ 自分の子供を喰らい、唇から、顎鬚から、爪から血が滴っている「無垢な父」と！

勇気を持ってあなたの方に話そう。人間の痛みを、鳥の、木の、石の痛みをあなたの方に話そう。全員が決心した。我々は死にたくない。私は報告書を持っている。全ての木、鳥、獣、人間はそれに署名した。父よ、我々を食べないでください。私は恐れずに、この報告書をあなたの方に手渡そう。

私は話し、お願いし、ベルトを締めて震えていた。

待っていた丁度その時、岩が動いたようで、大きな息が聞こえた。

《ほらあなたの方だ……ほらあなたの方だ……来られた！》と眩きぞくつとしてその方を向いた。

だが、エホバではなかった。エホバではなく、あなた

でした、おじいちゃん、愛するクレタの大地から生まれた厳しい支配者のあなたが、私の前に立っていた。真っ白なV字型の顎鬚、ぎゅっと閉じた乾いた唇、うっとりとした目は炎に満ち、翼があった。あなたの髪にはタイムの根が絡み付いていた。

あなたは私を見つめた。そして見つめられていた時、この世は雷電と風を積んだ雲だと、雲であり、また雷電と風を積んだ人の魂であり、その上を神が吹き、救済はないと感じた。

私は目を上げて、あなたを見つめた。私はあなたに《おじいちゃん、救済は本当じゃないの？》と訊こうとしたが、言葉が喉に張り付いてしまっていた。あなたに近づこうとしたが、膝がガクガクした。

その時あなたは溺れかけている私を助けようとするかのように、手を差し伸べてくれた。

私はもどかしげにあなたの手にしがみついた。あなたの手は色とりどりの絵の具で汚れていた。まだ絵を描いているかのように、燃えていた。あなたの手に触れて、勢いと力を得て、話すことが出来た。

「愛するおじいちゃん。私に命令してください」と私は言った。

彼は微笑んで私の頭に手を置いた。手ではなく、色とりどりの火であった。私の脳裏の奥深くまで炎が降りかかってきた。

「わが子よ、行きつけるところまで行きなさい」

その声は大地の喉の深みから出てきたかのように、深く暗かった。

彼の言葉は私の脳裏の奥深くまで達したが、私の心は驚いて跳び上がったりはしなかった。

「おじいちゃん、もっと困難な、もっとクレタらしい命令をしてください」と今度は一層大きな声で叫んだ。

私がそう言うや否や、一瞬にして、炎が空気をつん裂きシュウシュウ音を立てた。髪にタイムの根がからみ付いた不屈の先祖は私の視界から消え去り、まっすぐで命令に満ちた声だけがシナイ山の頂に残り、空気は震えていた。

「行きつけないところにまで到達しなさい」

私は驚いて目が覚め、跳び起きた。もう夜が明けている。起き上がった窓に近づき、実のなつたぶどう棚のあるベランダに出た。雨はもう止んで、石は輝き笑っていた。木々の葉は涙に溢れていた。

「行きつけないところにまで到達しなさい」

それはあなたの声で、世界中で誰もこのような力強い言葉を発することは出来なかっただろう。あなただけです、飽くことを知らないおじいちゃん！ あなたは召集された私の民族の不屈で絶望した指導者ではないのか？我々は良い生活や安定を置き去りにし、傷つき腹を空かせた間抜けの石頭で、あなたが先頭に立って、限界を打ち壊そうと突撃しているのではないのか？

絶望の最も輝かしい顔は神である。希望の最も輝かしい顔も神である。希望と絶望の遥か彼方へ、太古の限界の遥か彼方へ、おじいちゃん、あなたは私の背を押している。どこへ私を押しやろうとしているのか？ 私の周りを見廻す。私の胸の内を覗く。徳は気が狂い、幾何学も発狂し、物質も発狂した。新しい秩序を、新しい法を設けるために、法制定者の「理性」が再びやって来なければならぬ。世の中がより豊かに、より調和するようになるために。

それを求めて、あなたはそこへ、私を押していく。常にそこへ押してきた。私は昼夜を分かたずあなたの命令に従ってきた。行きつけないところにまで到達しようと出来る限り闘ってきた。そのことを義務としてきた。到達したかしなかったかは、あなたが言うてください。私

はあなたの前に立って待っていますから。

將軍様。私の戦いは終わり、あなたに報告します。どこで戦ったか、どのように戦ったか、傷つき、怖気づいたが脱走はしなかったと。恐怖で歯がガチガチと鳴っていたが、血が目立たないように赤いタオルを頭にしっかりと巻き、突撃しました。

あなたの前で私の魂のニシコクマルガラス^五の羽を一枚ずつ引き抜きます、魂が涙と血と汗で捏ねられた一握りの土塊となってしまうまで。楽になるため、私の戦いについて話します。楽になるため、徳や恥や真実を脱ぎ捨てます。あなたは、『嵐のトレッド』をどのように描き上げたのですか？ 絶望と不屈が光と闇と闘っている私の魂は、黄色い稲妻で縁取られた重い黒い雲にそっくりです。あなたはそれを理解し、剣のような眉の間で秤にかけて判断するでしょう。我々クレタ人が言う重い言葉を覚えていますか。『的を外したところに戻れ。成功したところからは去れ』も似的を外し、私にまだ一時間の人生が残されていたら、攻撃に戻りましょう。もし成功したら、大地を開いて、あなたの隣に行つて横たわりましょう。

將軍様、だから私の報告を聞いて批評してください。おじいちゃん、私の人生について聞いてください。もし、あなたと共に戦ったなら、もし、傷ついても人に痛みを悟られなかったとしたら、また、もし敵に決して背を向けたことがなかったら、どうか私を祝福してください！

先祖たち

身を屈めて自分の内を覗くと、身の毛がよだつ。父方の先祖は、海では残忍な海賊、陸では戦闘指揮官で、人間をも神をも畏れなかった。母方の先祖は、凡庸で純朴な農民であった。大地を信頼して一日中腰を屈め、雨や日射しを堅く信じて種を蒔いて待ち、収穫し、夕暮れには屋外の石の腰掛^六に座り、手を組んで神を信頼していた。

私の内なるこれらの相反する先祖たちを、どうやって調和させることが出来るだろうか。火と土を。

これらの和解出来ないものを和解させ、先祖の濃い闇闇を私の腹から取り出し、可能な限り光に作り上げることが私の唯一の義務であると感じた。これが神の定めた方式ではないだろうか？ 神の足跡をたどることによつ

て我々もそれを実行する義務はないのだろうか？ 我々の人生は稲妻のように短い、が、まだ何とか間に合うだろう。

森羅万象も、知らず知らずのうちに、この方式に従っている。生きとし生けるものは神の作業所であり、そこに神が隠れていて、泥に手を加えて変質させる。だから木々は花を咲かせ実を結び、動物は多くの子を産み、猿は運命を乗り越えて二本足でまっすぐに立つことが出来た。そして今、世界が創造されて以来、初めて人間が神の作業所に入って神と一緒に働くことを許された。そして、より多くの肉体を愛や勇気や自由に、作り替えれば替えるほど、更に一層、神の息子に相応しくなるのだ。

重く、満たされることのない義務。私は一生闘ってきたし、まだ闘っている。しかし、それでもやはり私の心には暗闇や澁が残る。そして、それでもやはり格闘がまた始まる。父方の大昔の先祖たちが私の内に潜んでいて揺れ動くが、深い闇の中では、彼らの顔をはっきりと見分けるのはとても難しい。私を創り出した内なる最初の驚くべき「先祖」を見つけようと。魂の表層——個人、民族、人類——を通り抜けて進むにつれて、一層強く聖なる戦慄に囚われる。始めのうち、それらの顔は兄弟や

父のように思われた。その後、根源に進んでいくうちに、毛むくじやらで頑丈な顎の一人の先祖が私の腹の奥深くから急に立ち上がってきた。腹を空かせ、喉を乾かせ、唸り声を上げ、目は血走っていた。この先祖は、人間に作り替えるようにと私に与えられた、手を加えられていない厄介な野獣だった。そして、もし出来るなら、もし時間があるなら、人間よりも更に高くに持ち上げるようにと。猿から人へ、人から神へ……というのは、何という恐れ多い上昇であろうか！

ある夜、私は友達と雪に覆われた高い山を歩いていた。道に迷い山中で夜を過ごした。まん丸い月が私たちの上を無言で照らし、空には一片の雲も無く、私たちのいる山の鞍部から下の平原まで、青白い雪がきらきらと輝いていた。人を不安に、耐え難くさせる濃厚な静けさ。神自身もまたこのような静けさに耐えきれずに、泥を手にとって人間を創ったが、それより前の何千世紀もの間、月光の降り注ぐ夜はこんな風だったのだろう。

私は友達より数歩前を歩いていた。気味の悪い眩暈が私の脳を包み込んでいて、酔っぱらったようによろけながら歩いていた。月の上のようにもあり、人類出現以前の住人のいない太古の土地を歩いているかのようにもあ

った。しかしその場所はよく知っていた。山の曲がり道で、遙か遠く、峡谷の深いところに、突然、いくつかの青白い小さな明かりが見えた。それは小さな村で、まだ寝ずに起きていたのだろう。その時、驚くべきことが私に起きた。それを思い出すと今でも身震いする。私は立ち止まってこぶしを握り締め、そのこぶしを村に向けて、怒り狂って叫んだ。

「お前らみんな、喉を掻き切つて殺してやる！」

しわがれた声で、私自身の声ではなかった。その声を聞くなり私は怯えた。体中が震え出した。友達が心配して駆け寄つて来て、私の腕を掴んで言った。

「どうしたんだ？ 誰の喉を掻き切るんだ？」

私は膝から崩れ落ちた。突然、言いようもない疲れを感じた。だが、友達を目の前に見ると、正気に戻り、呟いた。

「私ではなかった。私ではなかった。誰か他の人だった」

誰か他の人だった。では、誰？ 私の胸がそんなに深くまで、そんなに露わに開かれたことは、かつて無かった。何年も前から予想はしていた。が、その夜から私は確信を持った。我々の内なる闇の中に、たくさんの階層があり、しわがれた声、飢えた毛むくじやらの野獣がい

ることに。では、何も死なないのか？ この世において何も死ぬことは出来ないのか？ 我々が生きている限り、原始の夜、原始の月、飢え、乾き、先史時代の苦しみは、我々と共に生きて死に、腹を空かせ、喉を乾かせ、苦しんでいるのだろう。私が抱えている恐ろしい重荷が胸の中でうめいているのを聞くと恐怖に捉えられる。私は決して救われないのか？ 私の内臓は決して浄化されないのか？ 時おり、私の心の奥深くで優しい声が聞こえる。

「恐れることはない、私が法を作り、秩序を与えよう。私は神である。信じなさい」だが、その途端、私の腹から重いうめき声が聞こえ、優しい声は黙り込む。『偉そうなことを言うな！ お前の法は始末してやる。お前の秩序は壊してやる。お前を抹殺してやる。私は混沌である！』

時には、太陽は少女が歌っているのを聞くとうして、途中で立ち止まることがあると言われる。本当だったらいいな！ 下の大地で歌っている人間に魅せられて、必然が道を変えることが出来たらいいな！ 泣きながら笑いながら、歌いながら、我々が混沌に秩序をもたらず法を創り出すことが出来たらな！ 我々の内なる優しい声がうめき声をすっかり覆うことが出来るように。

私が酔ったり怒ったりしている時、あるいは愛する女

に触れている時、あるいは不当なことが私を窒息させ、神や悪魔、あるいは地上における神や悪魔の代理人に反抗する時、私の内なるこれらの怪物が、うめき声をあげ、隠し扉を壊そうと襲いかかって、再び光の中に上り、戦車を再び手にするのが聞こえる。勿論、私が最後の孫で、彼らは私以外に希望も、避難所も持っていない。復讐したり、楽しんだり、胸を痛めたり、彼らにまだ残っていることは、私と一緒にすることによってのみ、可能であろう。私が死ぬと、彼らも私と共に死ぬ。毛むくじやらの怪物や、苦しんでいる者の大群は、私と共に墓穴に転がり落ちるだろう。恐らくそのために、彼らは私をこんなにも苦しみ、急いでいるのだろう。恐らくそのために私の青春は焦り、反抗的で、悲惨なものとなったのであろう。

自分の魂であれ、他人の魂であれ、それを敬うことなく、彼らは殺したり殺されたりしていた。同様の無意味な無関心さによって、生をも死をも、愛し、また軽蔑していた。戦争に突入しようとした時には、ドラゴンのように食べ、子牛のように飲み、女と淫らなこととはなかった。夏は上半身裸で冬は羊の毛皮にくるまれていた。繋がれた獣のように冬も夏も臭っていた。

曾祖父が私の血の中で、今も生き活きとしているのを感じる。全ての先祖のうちで、彼が私の血の中で最も活力に満ちていたと思う。彼は額の上部の頭髮を剃り、長いおさげ髪を垂らし、アルジェリア人の海賊と仲間になつて海を放浪し、クレタ島の西の端にあるグランブーサという無人島に隠れ家造つた。そこから黒い帆をしつかりと張つて、通りかかる船に猛攻撃を加えていた。イスラム教徒の巡礼者を満載してメッカに向かつて帆走していた船もあれば、ハジス・セになるうと聖墓に向かうキリスト教徒を満載し、帆走していた船もあった。海賊たちは大声を上げてそれらの船を追い回し、鉤を投げ、斧を持つて甲板に乗り込んだ。キリストにも、モハメッドにも容赦はなかった。老人たちを虐殺し、若者たちを奴隷にし、女たちを仰向けにし、血まみれの顎鬚と女性の溜息を伴つて、再びグランブーサにもぐり込んだ。またある時は、香辛料を満載してアナトリアから突然現れた豊かな小型快速帆船を襲つたこともあった。シナモンやナツメグの実が、クレタ島の至るところで匂つていたという噂が、今もまだ老人たちの記憶に残つていた。というのは、おさげ髪をしたこの私の先祖は、香辛料を満載した船を襲つたものの、その処分に困り、クレタ島中の

村々の見知らぬ人たちに、贈答品として送ったということだ。

近年、この事件をクレタ島の百歳の老人から聞いた時、私は動揺した。旅をしている時はいつも、私の前、書き物をしていた机の上に、何故だか分からなかったが、シナモン一本とナツメグの実二つを置いておくのが好きだったから。

私の内なる声に耳を傾けながら、すぐに息切れして立ち止まってしまう理性ではなく、私の血に従うことが出来た時はいつでも、私の最も遠い先祖の出発点に到達したと密かに確信したものだ。その後、時が経つにつれ、次第にこの不可思議な確信を、日々の生活の出来事の中で、明らかにより強く感じるようになった。始めのうちは、それがただの偶然だと思い、気にかけなかった。目に見える世界の声と私の内なる声を関連付けることによって、私の理性の下にある最初の闇を突き抜け、隠し扉を持ち上げて、ついに見ることが出来るようになるまで

は。

見た瞬間から私の魂はしつかりとし始め、水のように頻繁に姿を変えて流れるようなことはなかった。そして今や照らし出された核の周りが凝縮し固まって、一つの

顔に、私の魂の顔になった。自分がどの野獣を受け継いでいるのか見分けようと、ある時は右に、ある時は左にと、不安定な道を進むことなく、確信をもつて進んでいた。というのは自分の真実の顔がどれであるか、唯一の義務が何であるかを知っていたから。その顔を出来る限りの忍耐と愛と技を持って仕上げるということを。仕上げるとはどういうことだろうか？ それを炎にして、もし間に合うようなら、カロンが来る前にその炎を光にすることである。カロンが私から何も奪うものを見つけないように。何故ならそれが私の最大の念願となったから。カロンに取って行かれないように、何も残さないようにすること——ただ僅かな骨以外は。

まず始めに、父方の先祖が生まれ育った大地が、私がこの確かさに到達するのを助けてくれた。父の一族はメガロ・カストロ^ハから二時間のところにあるバルバリという村の出身であった。ビザンツ皇帝のニキフォロス・フォカスが十世紀にアラビア人たちからクレタ島を奪回した時、虐殺を免れ生き延びたアラビア人たちを、いくつかの村に囲い込み、それらの村をバルバリと名付けた。私の父方の先祖はこのような村に定住し、みんなアラビアの精神的特徴を持っていた。誇り高く、頑固で、口数

が少なく、小食で、人付き合いが嫌いだった。長年、怒りや愛を自分の内のため込み、黙っているが、悪霊が彼らに乗り移った時、急に怒り始めた。彼らにとって最高の財産は命ではなく、情熱であった。善良でもなければ付き合い易くもなかった。彼らの影は重苦しかった。他人の影ではなく自分自身の影が。彼らの内なる悪霊が喉を締めつけ、窒息させる。海賊になるか、酔い痴れるかである。腕をナイフで切り付け、血を流し、心を軽くする。虜にならないように、愛する女を殺す。あるいは、取るに足りない孫である私が、暗い重みを変質させて霊にしようと苦勞するように、彼らもまた大変な苦勞をする。野蛮な先祖を霊にするとはどういうことか？ それは、無理やりに最上位の殉教をさせ、消し去るということである。

更に他の声が密かに先祖への道を私に示す。ヤシの木の前に立つと私の心は喜びで飛び跳ねる、祖国に、乾ききった埃まみれのベドウィン族の村に戻るかのように。ヤシの木はその唯一無二の装飾品であった。かつて、ラクダに乗ってアラビアの砂漠に入った時、人の足跡もない果てしのない絶望的な砂漠が、黄色に、薔薇色に、夜には濃紺に変わり、私の前で波打つのを遠くから眺めた

時、不思議な陶醉感に囚われた。何年も、何千年も後に自分の巢に戻る雌のタカのように、私の心は叫び声を上げた。

更にこういうこともあった。かつて、私はギリシア人の村近くの人里離れた小屋に、全く独りぼっちで住み、あるビザンツの修道僧が言ったように、風を育んでいた。つまり、詩を書いていた。その小屋はオリーブと松の木々に覆われ、枝の間から、下の方に真つ青な果てしのないエーゲ海が、遙か遠くに眺められた。金髪の髭の純朴で油污れた羊飼いのフロロスだけが、毎朝、羊の群れを連れて通りかかり、大びんのミルクと茹で卵八個とパンを持って来てくれ、去っていった。私が俯いて紙に書き物をしているのを見て、大きな頭を振り、《あれまあ！ だんなさん、何で、そんなたくさん書き物をしたいの？ うんざりしないの？》と大笑いをした。ある日、激怒して速足で通りかかった。私におはようと言う気さえ無かった。《どうしたんだ、フロロス》と彼に大声で叫んだ。大きな手を動かして、彼は言った。《ムジャ^九してやれ、だんなさん。一晩中一睡も出来なかった。だんなさんには聞こえなかった？ 耳持っていないの？ 向かいの山の羊飼いの音、聞かんかった？ くだばりやがれ！ 奴は

羊の群れの鈴の音を揃えんかった。眠れるなんてあり得ん！ 行くよ！》どこに行くんだ、フロロス？》《勿論、音を揃えてやるんだ。せいせいするよ》

さて、ある昼の事、卵にかけようと塩入れを棚から取ろうと立ちあがった時、塩が少し床にこぼれた。胸が締め付けられ、急いで床に腹這いになって、ひと粒ひと粒拾い集め始めた……。その時突然、自分がしたことに気づき、びつくりした。床に僅かな塩がこぼれただけで、どうしてこんなに悲しむのか？ どんな価値があるのか？ 何の価値もないのに。

後になって砂の上に他の印を見つけた。それを辿ると先祖にたどり着けるものだったのだろう。火と水に。

火が無駄に燃えているのを見る時、不安になって跳び上がる。それが無駄に失われていくのを見たくない。蛇口の水が流れているのに、入れる水差しがなかったり、飲む人がいなかったり、水をやる菜園がないのを見る時、私は走って行って蛇口を締める。

私はこれらすべての奇妙なことを体験していた。しかし、それらに密かな関連性を見つけようと、理性ではつきりと結びつけはしなかった。私の心は水が、火が、塩が無駄にされるのに堪えられなかった。ヤシの木を見た

時、私はとても嬉しくなり、砂漠に入って最早出たいとは願わなかった。けれども、長い歳月の間、私の理性はそれ以上先には行かなかった。しかし、私の内なる暗い作業所で、懸念が人知れず働き、これらすべての説明の付かない事柄が、私のうちで密かに関連し、一つ一つ隣り合って意味を持つようになっていったようだ。そして、ある日のこと、大きな町を眺めながら、ぶらぶら歩いていた時に、そのことを意識していなかったにも拘わらず、不意に、分かった！ 塩、火、水——これらが砂漠の三つの貴重な財産であることが！ きつと、それで、私の内なるベドウィン人の先祖の誰かが塩や火や水が無駄になるのを見た時、驚いて跳び上がり、それらを救おうと急いで走って行ったのだろう。

その日、大きな町では霧雨が降っていて、小さな女の子が屋根のある門に雨宿りの場所を見つけ、濡れた葦の小さな花束を売っていたのを覚えている。立ち止まってその子を見つめた。だが、私の心は今や楽になり、とても陽気になって、遥か遠くの砂漠をさまよっていた。

これらすべてのことは空想であり自己顕示であり、異国的なこと、遥か彼方のことに対するロマンティックな願望であるかも知れない。私が並べ立てたこれらすべて

の奇妙なことは、全く奇妙ではないのかもしれないし、私がそれらに与えているような意味合はないのかもしれない。そうかもしれない。だが、母からはギリシアの血、父からはアラブの血、という双子の血が私の血管を流れているという、構造的な偽りの影響は——偽りだったとしても——それは肯定的で実りあるものである。私に力、喜び、豊かさを与える。これらの二つの敵対する激しい情熱を、一つの合成物にしようとする私の闘いは私の人生に目的と一貫性を与える。私の内なる漠然とした疑惑が確かなものとなった瞬間から、私の周りの目に見える世界が秩序を保ち、私の内と外の人生は、二重の起源を見つけることによって和解した。このようにして、父に對して抱いていた密かな敵愾心が、何年もの後、父の死後に愛になることが出来た。

【註】

本訳は Νίκου Καζαντζάκη 「ΑΝΑΦΟΡΑ ΣΤΟΝ ΓΚΡΕΚΟ」

一九八二年版 Εκδόσεις Ελένης Ν. Καζαντζάκη, Αθήνα を底本として ΠΡΟΛΟΓΟΣ Οι Ηρώγοι の章を訳したものである。

一 エル・グレコ (El Greco) : (一五四一—一六一四) クレタ島、現イラクリオ出身の画家。本名はドミニコス・テオトコプロス

(Δομήτιος Θεοτοκόπουλος)

二 秋の初めての雨 (πρῶτοβρόχι) : ギリシアでは五月から九月末ごろまで晴天の夏日が続くが、十月の始めごろ突然雨が数日降り続き気温も下がり、秋の到来となる。

三 ヤマウズラ (περπορέδικα)

四 角を持った預言者…預言者モーゼは中世ヨーロッパ美術において、ミケランジェロの彫刻やレンブラントの絵画にみられるごとく、しばしば角のある姿で描かれる。

五 ニシコクマルガラス (καλακούδα)

六 石の腰掛 (πέδιλα) : 石またはセメントで出来た、腰かけるための一切の物を指す。家の外側に張りだした長椅子状の低い台、低い塀、庭や道路上に置かれた大きな石なども含む。

七 ハジス (χαΐτης) : 聖地を訪れる巡礼者。キリスト教徒の場合にはイエルサレム。イスラム教徒の場合は、メッカとメディナ。

八 メガロ・カストロ : 現在のイラクリオ

九 ムジャ (μουτζα) : 片手または両手を目一杯開き、その手のひらを人に向けて突きだし、侮辱を示す仕草。

(協力…現代ギリシア教室エリニカ有志)